



Title	「併合」前朝鮮における体育団体設置者の特徴について
Author(s)	西尾, 達雄
Description	海外出張報告
Citation	日本社会事業大学社会事業研究所年報, 25, 193-219
Issue Date	1989
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44218">https://hdl.handle.net/2115/44218</a>
Type	journal article
File Information	NSJDN25_193-219.pdf



(海外出張報告)

## 「併合」前朝鮮における 体育団体設置者の特徴について

西尾達雄

はじめに

いわゆる「日韓併合」以前の大韓帝国期末の朝鮮では、いくつかの体育団体が結成されている。この時期の体育団体については、羅絢成『韓国体育史』<sup>1)</sup>、同『韓国体育史の研究』<sup>2)</sup>、あるいは大韓体育会編『大韓体育会史』<sup>3)</sup>などで明らかにされている。羅絢成は、「運動会は、当時の開化運動の推進体として、また国家的重要行事としての様相を帯びるようになった。このような運動会の刺激を受け、体育は徳育及び知育と並行して国民教育に不可欠な一要素であることを認識されるとともに、国家情勢に照らして、体育運動を通しての民族団結こそは、国権回復の唯一の力であることを悟り、民間体育団体の組織が活発に展開された」<sup>4)</sup>と述べている。また筆者はすでに、このような体育が「国権回復の唯一の力である」という認識が、当時活発に展開されていた愛国啓蒙運動との関連している事実を指摘し、愛国啓蒙団体の一つである「学会」の体育思想と活動について検討を進めている。<sup>5)</sup>

本稿は、体育団体設立が「運動会」という形態をとった民族運動を背景にしている点を確認するとともに、体育団体設立趣旨の理念を再検討し、設立趣旨を生み出した設置者の思想的・階級的特徴を究明することをねらいとしている。つまり、体育団体と愛国啓蒙運動との結び付きを体育団体の側から検討しようとするものである。

## I 愛国啓蒙運動の特徴

まず最初に、愛国啓蒙運動とは何かについて簡単に述べておこう。

1894年、一地方政治の悪政を批判する事に端を發した甲午農民戦争が起った。その中で要求された国政改革は、甲午改革に反映されたが、親日政府の施策によって自主独立の国家体制を確立するには至らなかった。その後国民の間では、民族危機の深化に対し、国権回復と自主独立の達成をめざす民族運動が全国的に繰り広げられるようになった。

その中心を担ったのは、独立協会に参加した人々であった。独立協会は、1896年徐載弼（ソ・ジェピル）という甲申政変（1884年）後米国に亡命した開化派人士を中心に創設されたものである。徐載弼は、一市民として国民の先頭に立ち、国民大衆の啓蒙によって民族の自主独立への大衆的覚醒と近代的な自主的立憲国家としての国家法秩序の確立とに努力したのである。<sup>6)</sup>

しかし、独立協会の活動が封建勢力の牙城ソウルで展開されたことや、その運動が地方に波及せず全国的規模でなされなかったことなどによって、保守派権力の反動攻勢にうちかつことができず失敗してしまうのである。

だが、それによって拡散された大衆的な民権思想は、20世紀初頭の愛国啓蒙運動の中に継承されるのである。もっとも、内修外学のスローガンのもとに新しい教育と文化の普及を当面の主要内容としたこの運動は、その政治的性格においては、独立協会の運動に比して一步後退したものとされている。<sup>7)</sup> そこには、歴史的的情勢の変化が作用していたのである。つまり1905年以後、朝鮮は日本の「保護国」とされるが、こうした情勢の変化が彼らに国政の改革よりも、日本の侵略から国権を回復することを第一義的民族課題とさせ、これを優先させたからである。

また、この時期の国権回復運動のもうひとつの潮流として、反日義兵運動がある。これは、国権回復を第一義的課題として掲げている点では、愛国啓蒙運動と同様であるが、日本侵略者と共に追隨する政府に武力的に対決した点で啓蒙運動と一線を画している。この義兵運動に対して、愛国啓蒙運動の側は、民族敵に対する怒りは共通のものだが、義兵運動は『不度時、不量力』の無謀な蜂起であるとして批判的であった。

しかし、彼らが、義兵運動を愛国的義挙として評価していたことも見逃してはならない。それは、私立学校用の国史教材（『幼年必読』、『東国史略』、『大韓歴史』など）および一般むけの出版物で抗日上疏および憤死、義兵将の自績などを愛国精神の亀鑑として紹介していることから理解することができる。<sup>8)</sup>

このように愛国啓蒙運動は、国家回復のための直接対決を評価しながらも、今は、将来の自主独立に備えて実力を養成するために、大衆の愛国精神を啓発し、近代的教育と産業を振興させる運動を展開したのである。こうした目標を持った活動の中で、民間の啓蒙団体や学会が各地に続出し、大衆講演、出版活動、学校設立などが活発に行われたのである。

このような愛国啓蒙運動の中で、体育運動と関連すると思われる教育救国運動、とりわけ学会の活動について次に整理しておこう。

## Ⅱ 学会の活動と体育

この時期には、大韓自強会をはじめとして多くの民間結社や学会が結成される。大韓自強会は、独立協会が弾圧されて以後、その思想的系譜につらなる民間結社で、会長には尹致昊（ユ・チホ／元独立協会会長）が就任している。この団体は、北は義州から南は済州島まで各地に支会を組織し教育の拡張と産業の発達の研究を目的として全国的規模で活動したといわれている。<sup>9)</sup> しかし、同会は、1907年の高宗譲位、第三次日韓協約の強要に反対する集会を組織し、その際起った事件により解散を余儀なくされた。

その後の主要な結社としては、大韓協会や新民会があげられる。大韓協会は、大韓自強会の活動を引き継ぐものとして張志淵らの発起によって組織されたものである。しかし、その認可の条件として日本人犬垣丈夫を顧問とすることがあり、その活動は大韓自強会以上に制約されたものであった。

このような中央での活動が制約されているなかで、各地方では、それぞれの地域出身者たちを中心として学会があらわれ、大衆啓蒙と教育振興のための活動を展開した。その最初のものは、1906年の西友学会と漢

北学会である。

これらの学会に対して、政府は、「日本ニ於ケル教育会ノ如キモノナリト雖聊カ其類ヲ異ニスル点」があると前置きして、「韓国ノ学会ハ唯教育ノ普及発達ヲ目的トスルノミナラス併セテ政治ヲ談議スル機関ニシテ教育会ト政治団体トノ混同セルモノナリ」と捉えていた。<sup>10)</sup>

そして、このような学会は、「其弊ヤ放任ス可ラサルモノアルヲ以テ学会令ヲ發布シテ、学芸ノ普及発達ヲ目的トスル学会ニアリテハ政事ニ関涉シ營利ヲ営ムコトヲ得サラシメ以テ所謂純粹ナル教育団体トナセリ」<sup>11)</sup>としたのである。さらに、学会の性格を特徴づけるものとして、上記の教育会と政治団体との混同というところをえかたは、1909年4月頃の学部(俵孫一次官)の判断であったが、同年9月には、学部の判断は、次のように政治団体が教育を語っているというように変化しているのである。

「従来韓国ニ於テハ諸種ノ団体アリ此等ノ団体ハ重ニ政治上社会上ノ事項ヲ目的トスルモ兼テ教育学芸ニ関スル事項ヲ目的トシテ政治ト教育トヲ混同シ延イテ学生ニ政治思想ヲ注入スル弊アリ」<sup>12)</sup> というのである。

もっとも、学会の設立は、1906年以後、日帝統監府の強圧措置による、事実上わが民族の主権回復運動が出来なくなると、『十年之計、莫如種樹』といわれているように、直接的な抵抗運動を後日にして、表面上は運動の方針を学会活動に切りかえたところから生じたのであり、その最大の目標が実は独立思想を鼓舞することにあつたわけであるが、表面上は単なる知識の伝達と普及のための啓蒙におかれていたのである。<sup>13)</sup> このような愛国啓蒙運動、とりわけ教育を通しての啓蒙運動の展開が私立学校における教育、体育の発展に寄与していたのである。

平壤に大成学校を創設した安昌浩(アン・チャンホ)は、平壤を中心とする全国的規模の秘密結社新民会を結成しているが、その活動目標をみれば、このことが明らかである。その活動目標は、以下の通りである。

- (1) 国民に民族意識と独立思想を鼓舞すること
- (2) 同志を発見して団結し、国民運動の力量を蓄積すること
- (3) 教育機関を各地に設置し、青少年の教育を実施すること
- (4) 各種商工業機関をつくり、団体の財政と国民の富力を増進すること<sup>14)</sup>

このような目標達成の一環として安昌浩は、大成学校を設立したので

ある。また、一方では株式会社として平壤馬山洞磁器会社、出版活動のため太極書館（ソウル、平壤、大邱）などを設立し、産業面での進行を計画し、自立的な経済的基盤を確保しようとしたのである。これらの活動は、全国のモデルとして拡大する計画であったが、1910年の併合を前に弾圧され消滅してゆくのである。

大成学校において体育が重視された事実については、既に明らかにしているが、要約すれば、「反日愛国者の備えるべき体力を訓練し、民族精神を備えた人間を形成すること」であった。<sup>15)</sup>

また、学会の中でもっとも早く結成された西友学会・西北学会の機関誌には、毎号、衛生や体育に関する論説や論文が掲載されている。<sup>16)</sup> 表1は、西友学会の機関誌『西友』第1号から第14号までの関係論文及び

表1 『西友』誌上に掲載された論文及記事

論文記事	発行号	著者	題目及び主な内容	
体育論 教育論	第4号 第1号 第9号 第12号	金義善 柳東作 朴聖欽 教育部	体育の必要 体育徳育知育 普通教育は国民の要務 (無題) 王公教育の中で兵式運動 について述べる	
	第14号 第6号～第10号	不祥 朴殷植	人格は如何に養成すべきか(統) 幼児教育について身体形成の重要性 を説く	
衛生論	第1号 第2号, 第3号 第5号, 第7号 第6号 第8号 第8号 第9号	柳東作 金鳳現 同上 李奎溟 劉漢性 李達元 朴相穆	学校衛生の必要 衛生論 同上 衛生の要論 衛生論 衛生論 衛生論十条	
	第11号～第13号 第3号～第10号	衛生部 金明潯	児童の衛生 幼児教育における身体形成, 運動, 遊戯等	
	その他	第4号 第7号～第10号 第7号 第7号 第10号	金有鐸 盧伯麟 金聖烈 時事 韓光鎭	西友学生親睦会運動場演説 愛国精神談 西友学生運動会運動歌 連合運動会開催の記事 外国人の公権及公法上義務, 身体の 自由権
		第13号～第14号 第13号 第13号	不祥 不祥 時事	『自助論』として体力について述べる 『民法講義の概要』で自然人について 私立学校連合運動会の記事

記事を整理したものである。<sup>17)</sup> 西友学会は、既に述べたように、主権回復のために国民に独立思想、愛国思想を鼓舞するために結成されたものであるが、新教育を普及して人材を養成して民族啓蒙の一手段として月報を刊行したのである。そこに様々なテーマで体育、衛生論を展開したことは、独立運動家の身体に対する科学的な認識と身体形成の方法を提起するものであった。衛生論は、単に身体や環境を清潔にするためにのみ強調されたのではなく、愛国的行動を実現するためには健康な身体が必要だという認識があったのである。また体育論の中でも李鍾満の「体育が国家に対する効力」という論文は、体育は精神的国民を創る根本であり、国民の団結力を生み出す源であり、国家が強固になる基礎であると述べている。この体育論や衛生論の目的は、さらに運動会という形態で実践され、同時に開かれた演説会や懇親会でも強調され、これらが結合して学生や民衆の志気を高め国権回復の方向へと導くものであったのである。

また、これに続く他の多くの学会もその目的遂行のために、学校設立にあたったが、その一つに畿湖興学会の畿湖学校がある。同校は、1908年6月20日に開設されているが、その設立要旨は、地方の教育が教師の欠乏によって発展しないため、畿湖学校で教師の資格のある者を養成しようとするところにあった。同校は、師範学科と中等学科で編成され、本科と特別科をもち、卒業年限は、本科3年、特別科1年半とされていた。学科目は、修身、教育、学校管理法、地文及び他誌、歴史、物理、化学、博物、算術、語学、経済、法学、農学大要、図画、音楽、体操と、いろいろな多面的なものであった。しかも各教科担当の教師の中で、体操を李恆植、趙熙嶽、俞致勲、南基爽らが当たっていたのである。<sup>18)</sup> 他教科の担当教師が一人で2～3科目を担当していたのに対し、体操は四人の教師が担当していたのである。

畿湖興学会の活動については、後日詳しく検討する予定であるが、このような事実から見ても次のようなことを指摘することができる。すなわち、開化期朝鮮における政府の近代学校設置とその教科目配当は、近代国家建設に必要な人材の育成という観点からなされたということができるが、この学校における教科目は、単に近代化政策として配当されたものではないと考えられるのである。当時の学会活動の性格からして、

大成学校や西友学会など同様の理念に基づくものであったと考えられるからである。特に、体操担当教師が他教科担当教師より多かったという点は、どのような理由であろうとも、体操教師を多く採用する必要性があったということであり、体操をより多く行なったと考えることができるのである。当時の私立学校の多くが兵式体操を盛んに行なっていたことを考えあわせれば、この学校でも同様の趣旨で行なわれていたと考えられるのである。

ところで、愛国啓蒙運動の指導思想を代弁した思想家は、ほとんどが漢学者であった。皇城新聞の柳瑾、朴殷植、張志淵、大韓毎日申報の梁起鐸、申采浩らは、当時を代表する啓蒙思想家であったが、いずれも漢学者であった。彼らは、18世紀後半期の開化派の俊才俞吉濬の『西遊見聞』、1890年代清国変法運動の理論家梁啓超の『飲氷空文集』などから思想的影響を受けていたという。<sup>19)</sup> このことは、朝鮮実学の北学思想を淵源とする近代開化思想が、甲申政変—甲午改革—独立協会—愛国啓蒙運動の諸活動の中にその底流として貫かれていることを示している。<sup>20)</sup>

このような、漢学者の中で、湖南学会の教育部長であった李沂は、新しい学問の重要な要素として、体育を主張している。彼は、これまで自分が学んできた学問は、「国家存亡」の現在では全く「無用」なものであり、それを学んだ自分は「国家が亡びるというのにただ見ているばかりの人間奴隷に甘んじて、それから開放する方法を知らない人間になってしまった」と反省し、「三育の法」を主張するのである。李沂の体育に対する考えかたは、旧学問における教育が、8～9歳の子どもを一日中坐学で縛るものであり、全く子どもの健康と発育を阻害するものであるという認識に基づくものである。そして健康と体力のある子どもを育成することが「国家存亡」に対応する教育の課題であるというものであった。李沂は、このような主張を「一斧劈破論」<sup>21)</sup>で述べているが、このような教育認識は、当時の私立学校の多くに共通するものであった。そのことは、当時の私立学校で多用されたといわれる『初等倫理学教科書』<sup>22)</sup>に見ることができるのである。そこでは、「保健健」「養道徳」「盡知能」というように「体、徳、知」について述べられていた。「保健健」では、(一) 清潔を貴ぶこと、(二) 節度を守ること、(三) 嗜欲を戒めること、(四) 操練に勤めること、という四つの課題を設定している。これをきちんと実

行することによって、衛生的で健康な身体を作ることができるとしている。特に、「操練に勤める」理由をみれば、何故「保康健」を他の教育と同等に含めているかを知ることができる。つまり、「東西各国のひとは皆、日々に操練に従事し、其外にも撃剣や馳馬や蹴鞠や角觥や習射や撃槍や遊泳競渡の各種を練習し、為戯為楽する故に其人種が強く、国が亦強いのである。弱国の少年たちは、此等の體育を知らないことによって目が朦朧し、背が佝僂になる。……人弱ければあるいは死ねば、国まさに安頼せず、青年諸君よ其善を自ら愛せよ」<sup>29</sup> というのである。ここでは、強国といわれる国々では、體育をよくやっている。だから人が強壯になり、国もまた強国となるのである。したがって、若者は体を鍛えて、国家が安泰するように努めなければならない、としているのである。

以上のように愛国啓蒙運動は、学校教育、実業、出版事業を通じて民智を啓き、民力を養うこと、そのことによる民族の実力養成を目的としていたのである。とりわけ、学会やその他の私立学校での教育は、愛国精神鼓舞と体力育成の拠点的役割を果たしたといえよう。

このような愛国啓蒙運動を主導的に担ったのは、李沂のような漢学者だったのである。このことは、当時の朝鮮において、旧来の学問・教育との決別と新教育の受容が進行している事実を示しており、これ以後新しい階層が生まれ、新しい教育と文化を育てていくようになることを示しているといえよう。このような新しい流れの中で「学会」を中心とした教育救国団体は、私立学校を設立し教育を実践したのである。その教育実践は、新教育の中に民族危機→民族意識→体力づくり・兵士訓練→独立精神＝国権回復という思想的図式が位置付けられ、体育活動重視の思想と運動を展開するようになったといえることができるのである。このような社会的諸運動の発展の中で運動会の性格が変化し、民族主義的な体育団体が生まれるようになるのである。最後にこのような運動会の推移といくつかの体育団体を取り上げ、その性格について検討を加えることにしたい。

### Ⅲ 運動会の変化と体育団体の結成

#### 1 運動会開催の経緯

運動会の始まりは、1896年（建陽元年）5月2日、英語学校で行われた花柳会という催しであった。それは、英国人教師ハッチスン（Hutchison）の指導によるものであるが、その目的は、景色の良いところで運動会を兼ね、心身の鍛練と寛大で勇往邁進の気像を養うためであった。<sup>24</sup> それは、漢学中心の坐学からの開放であるとともに、体育活動の教育における役割を理解させる契機となるものである。その後運動会は徐々に増えて行き、1905年から1909年にかけては、「運動会全盛時代を成し遂げ」<sup>25</sup>、毎年各学校で開かれるようになり、結局各学校連合運動会に発展したのである。

英語学校・花柳会以後「日韓併合」までの運動会は、李學來によって新聞資料等から198事例が明らかにされている。<sup>26</sup> もちろん、これだけが当時行われた運動会のすべてというわけではないことは言うまでもない。<sup>27</sup> その主なものは、表2の通りである。198の運動会の事例から分かることは、1899年頃までには13事例でほとんど官立学校が中心であったのに対し、残りの事例が1905年以降に開催されたもので、民間団体や私立学校でも運動会を開催するようになったことを示している。そして、1907年以後学部は、学部主催で春・秋の2回の運動会に定期化しようと思図したが、学部主催以外の運動会が圧倒的に開催されている。因みに、1905年以後各年間に開催された運動会の数は、1905年代 2例、1906年代 17例、1907年 28例、1908年 84例、1909年 20例、1910年 35例であった。

1895年の甲午改革以降、学校教育制度が確立され、体育が学校教育の一つの教科目として取り入れられ、官・公・私立各学校に普及されてきた。しかし当初は、予算や教員などの不足から振るわなかった。しかし、その後十年足らずの間に徐々に成果を上げるようになった。特に、1905年の第2次日韓協約以後、日本の朝鮮侵略が激化する中で、民族危機意識を背景に私立学校を設立し、「民族意識の鼓舞と体力づくり」を目標として、体育を重視するようになったのである。運動会は、その活動の基盤になったのである。

表2 1896年から1910年までの主な運動会

年月日	主催者	場所
1896. 5. 2	英語学校花柳会	訓練院 S
1896. 5. 31	官立小学校運動会	訓練院 S
1897. 4. 11	京城学堂・運動会	弘化門外丘陵 S
1897. 4. 27	官立小学校運動会	訓練院 S
1897. 6. 16	英語学校・運動会	訓練院 S
1898. 5. 28	官立外国語学校・大運動会	訓練院 S
1899. 4. 21	官私立小学校運動会	訓練院 S
1899. 4. 29	外国語学校学徒大運動会	訓練院 S
1899. 5. 10	武官学校学徒大運動会	弘濟院 S
1899. 8. 23	日本守備隊陸軍将卒運動会	阿峴等他 S
1899. 8. 24	日本守備隊陸軍将卒運動会	三仙坪 S
1899.10. 7	日本公立小学校秋季運動会	前南小営 S
1905. 5. 22	皇城基督教青年会・運動会	新興寺 S
1905. 5. 29	海州浄土宗教会学校春季運動会	不明
1906. 4. 22	壽洞私立興化学校春季運動会	不明
1906. 5. 9	学部主催官公私立連合運動会	不明
1906. 6. 10	大韓体育倶楽部・運動会	永道寺 S
1906.10.27	各私立学校大運動会	訓練院 S
1907. 4. 3	官私立学校大運動会	訓練院 S
1907. 5. 2	学部・春季連合大運動会	訓練院 S
1907. 5. 5	西北学会主催連合運動会	三仙坪 S
1907.10.26	学部・秋季連合大運動会	訓練院 S
1907.11.22	青年学徒運動会	永道寺 S
1908. 3. 9	安岳・載寧・長淵・信川郡連合大運動会	不明
1908. 4. 10	仁川港官公私立学校春季連合運動会立	不明
1908. 5. 21	学部・秘苑運動会	昌徳宮秘苑内広場 S
1908.10.23	漢城内各女学校運動会	西大闕 S
1908.11.08	咸鏡南道各学校秋季運動会	咸興遺豊湖量前坪
1909. 5. 3	学部・連合運動会	訓練院 S
1909. 5. 8	鍾路青年会運動会	三仙坪 S
1909. 5. 20	義州郡大運動会	不明
1909.10.19	度支部一般官吏運動会	将忠壇 S
1909.10.30	青年会幼稚部と普成中学校幼年部 蹴球競争会	訓練院 S
1910. 4. 29	官立漢城高等学校通信管理局運動会	将忠壇 S
1910. 5. 7	龍山坊内各私立学校連合運動会	西江坊栗島付近 S
1910. 5. 11	平壤大成学校・運動会	平壤城内慶山地
1910. 5. 12	私立中学校連合運動会	三仙坪 S
1910. 5. 12	漢城内基督教各学校連合運動会	西大闕興下門内 S
1910. 5. 20	普成専門学校運動会	将忠壇

\*欄内記号「S」は、ソウルを示す。

運動会は、「青年学生たちの運動会というだけでなく、その地方民衆全体の運動会であった。活発な唱歌に歩調をそろえ行進する学生たちの姿を見物するために遠く二～三十里外から、餅と弁当を支度してくる熱心な民衆たちの姿は壮観であった」<sup>28)</sup>といわれるものであった。このような運動会は、いわば伝統的な村落共同体的性格を持つとともに、運動会と同時に開かれた演説会や懇親会などで当時の社会状況の認識や相互の情報交換を行っており、単なる共同体的祭の代替物というものではなかった。むしろ、当時の運動会に対する当局の評価は、「此等私立学校の中には、名を学校に籍るも毫も其実なく、或は青年子弟を集めて、日夕遊戯調練のみを事とし或は不良の教科書を使用し、政治と教育とを混同し、排日思想を注入」<sup>29)</sup>するというような否定的なものであった。

政府は、このような愛国的な体育運動を「実」のない教育と位置付け、この実態を改革しようとしたが、その一つが、運動会を春・秋2回として統制下に置くものであった。1909年5月3日の学部主催の官・私立学校連合運動会は、学部主催としては最後の連合運動会であった。それは、日韓併合の気運が濃くなり、恥辱的な進展に憤怒した国民の排日思想が陰悪となり、集团的義挙にはしることを恐れた学部が、1909年12月27日に財政難を口実として各地方官・私立学校に通達を出し、翌年から連合運動会を廃止することにしたのである。しかし、表2に示したようにその後も各地で運動会は、引き続き開催され、「併合」2カ月前の1910年6月12日まで行われていたのである。

## 2 運動会の統制と民族主義的性格

1905年以後は、「ある時は一校を単位として、ある時は隣接の多くの学校が共同して大連合運動会を開催した」<sup>30)</sup>のであるが、これを統制しようとしたのが1907年の大連合運動会であり、結局統制の意図も果せず廃止にまで到るのである。

この時期の運動会の内容は、1907年の春季運動会から見る事ができる。これは、それ以前の各学校の運動会を「統制」する意図で行われたものであるが、それ以前の運動会を反映していると思われるので、以下その内容を見ていきたい。表3のような節次によって、数千名の学徒が

隊伍を厳肅に、礼儀正しく各種の運動を行っている。<sup>31)</sup>

当日、参集した来賓は、各府・部・院・廳・官人及び各社会代表であったが、各大官以下諸氏は同夫人づれで来臨した。会場整理のために巡検20名と憲兵20名が派遣された。また、「注意事項」として、「静肅のために……他人の視聴を妨害させないこと」、「徽章」を指定したところに「注意し付着」することなど、警備のために巡検、憲兵を派遣されるという警戒下で行われたのである。<sup>32)</sup> さらに内容をみれば、この運動会では、「連合体操」と「学校体操」のほか娯楽的種目が中心となっており、団体訓練的種目は取り入れられていない。このような内容をもつ運動会で、学部大臣李完用は、諸学徒に「将来国事が諸君の肩にかかるものだから、熱心に修業するように」<sup>33)</sup> という演説を行っているのである。

そしてまた、節次にあるように、「運動歌」が歌われて志気発揚に用いられた。この「運動歌」は、軍部主事金有鐸に依頼し、軍楽及び歩調に

表3 1907.5.2 官公私立学校春季連合大運動会・節次

順序	科 目	当 次 隊 名
1	集合整列（一同敬礼）	全隊
2	行進（運動歌）	同上
3	連合体操	同上
4	旗取	第四小隊
5	毬拾い	同上
6	球割り	各学校から20名ずつ選出
7	昼（休憩）	
8	各学校体操	各学校任意人員
9	二人三脚	第二小隊
10	徒歩競争	第三小隊
11	騎馬競争	第一小隊
12	職員競争	有志者
13	来賓競争	同上
14	優等旗授与	
15	行進（運動歌）	全隊
16	整列（訓辞万歳）	

合わせて制術され、各学校の運動歌が「統一」されたものであった。<sup>34)</sup>つまり、後に見る大韓体育倶楽部運動歌や少年男子歌など類似の運動歌が各種の運動会で歌われていたが、それらを整理し画一化したのが、この運動歌であった。その歌詞をあげると、以下のようである。

#### 〈運動歌〉

大韓帝国光武の時代 富強安泰専ら国民教育普及にあり  
我ら徳磨き智能発達せしめ 文明開化の先導者にならん  
社会上多くの事業に当らんとせば 体の内外健康なるが一大清福なり  
勉強するとき勉強し学問練習し 運動するとき運動し血脈流通させ  
勇壮なる精神にて校門出て 仲間と隊作り 足並み揃え行進せん  
天気よき平原広野 愛すべき日々 太極旗の下 我が学校愉快地に運動せん  
人十なら己百なる競争心もちて活発に競争し前進してみん  
正当なる名誉心中にあり 規律厳守し違反やめん  
先行く人自制し暫く休まん  
万人讃揚一等賞は心中のものなり  
勝ちを好みて負けを嫌がるは一国なり一身なりと一般なり  
上帝におかれては徳高き最貴人物にて 何事であれ発奮すれば目的達し  
進め進め大声を揚げて 去嚚心出さずいざ行かん  
大皇帝陛下栄光あれ  
我が学校全体の名誉一層光輝き  
学徒たちよ学徒たちよ青年学徒たちよ  
忠君心誠愛国精神忘れるなかれ  
勝たんとして負けるも落胆するなかれ  
明年此の時再開し勝負決さん 一日中愉快地に楽しまん  
凱旋歌歌い帰らん 杏花咲く夕陽の天 万歳万歳 万万歳 万歳 万万歳  
大韓帝国 皇帝陛下 万歳万万歳<sup>35)</sup>

学部は、これまでの運動会の弊端として「課業を廃し」徒に運動ばかりしていると非難し、これを「統制」しようとしたのであるが、この「運動歌」もその歌詞を画一化し「統制」しようとするものだったと考えられる。この歌詞では、「富強安泰」や「文明開化」、さらには「社会

上の事業」の達成のために「国民教育」を普及し、健康な体をつくろうとは述べている。しかしここには、国を守るためとか、独立のためとかという主張が見られないのである。これは、大韓体育倶楽部の運動歌などとは決定的に異なる点である。

このような「統制」下で行われた運動会は、確かに1905年以降の運動会の内容や形式を反映したものと考えられるが、1909年の連合運動会廃止後も継続して行われた私立学校の運動会の事実は、それがそのまま反映されたものではないことを示している。その一例として、平壤の大成学校での運動会がある。その模様を皇城新聞では以下のように報じている。

「11日、平壤大成学校では、大運動会を城内慶山地で挙行了。300名の学生が青・紅両隊に分かれ39種目で行われた。軍楽隊と舞童戯はその興味を一層大きくした。時々速報されるその勇鋭活発な気象は壯観であった。内外国官吏紳士及び一般男女観覧者が数万名いた。そして、ここで一つ特記すべき事実は、その前にあった耶蘇教中学校運動会時でもそうだったが、平壤城内戸戸家家に太極旗を掲揚祝賀したりした。これは、大成学校一校に極限された運動会ではなく、風前燈火の国権を憂慮する国民たちの国家独立闘争意識の一つの象徴であるといえるだろう。」<sup>36)</sup>

運動種目や節次は、これだけでは明らかではないが、39種目の内には、「高跳び」などの種目が行われており<sup>37)</sup>、今日の陸上競技大会の種目を含むものであった。したがって、学部主催の連合運動会の節次に見られるような体操・娯楽中心のものとは異なったものであった。その事は、同月行われた他の私立学校の連合運動会を連合陸上競技大会として述べていることから判断できる。すなわち、漢城市内の各私立学校では、学部の財政難を口実とする運動会廃止に抗議して、経費を共同負担して、五星学校、普成学校、培材学堂、中央学校など八つの学校が三仙坪で盛大な連合運動会を開催した。これが、事実上連合陸上競技大会の最後であった<sup>38)</sup>、といわれている。

このように、私立学校を中心とする学校での運動会の性格は、多様な種目を行う中で、競争心を高め民族的自覚を促し、国家危機に立ち向かう精神と体力を養成しようとするものであったといえよう。このような民族主義的な運動会の活動に刺激されて、いくつかの体育団体が結成されたのである。

### 3 体育団体の結成

1905年5月22日、新興寺で皇城基督青年会が初めての運動会を開催したが、これが社会人による最初の体育団体としての活動であった。しかし団体として正式に組織されたのは、翌年(1906年)3月11日、槐洞金基正宅で玄暘運、申鳳休、韓相宇等の発起で大韓体育倶楽部が発足されたことである。<sup>39)</sup> そして、同年6月10日40余名が東門外の永道寺で組織的な体育機関の主催による我国最初の運動会を開き体育の一般化とともに学校体育が兵式体操の一部に局限されていた限界を払い内容的にも実際的にも充実させる役割を果たしていくのである。<sup>40)</sup>

表4は、『韓国体育史』で叙述された記事を表に纏めたものである。<sup>41)</sup> 同書では、この時期に結成された体育団体については、親日・反日の区別なく列挙しているが、これを区別してみると、少なくとも体操研究会(1909.10創設)は、他の団体と性格を異にしているといえる。というのは、拙稿『1909年韓国改正学校令にみる学校体操』で明らかにしたように、当時、政府は「兵式体操」にかわる「学校体操」とい

表4 1906年から1910年までの主な体育団体

年代	団体名	発起人
1906. 3	大韓体育倶楽部	玄暘運, 申鳳休 他
1906. 4	皇城基督教青年会運動部	ターナー(Turner), 金奎植 他
1907. 10	大韓国民体育会	盧伯麟
1908. 8	大同体育倶楽部	権性淵, 趙相鎬 他
1908. 9	武徒機械体育部	李熙斗, 尹致時
1909. 1	大韓興学会運動部	尹冀鉉, 安布貞 他
1909. 7	射弓会	李相弼, 李容紋
1909. 8	少年光昌体育会	不明
1909. 10	体操研究会	李基東, 趙瑗熙, 金聲集
1910. 2	青強体育部	崔聖熙, 成熙

う教材を広めようとしていたのであるが、この団体は、その推進者である李基東を中心として作られたものであるからである。<sup>42)</sup> 従って、体育団体も運動会の性格と同様、二つの側面を持っていたのであり、すべてが民族運動と結び付いていたとはいえないのである。

以下では、民族運動と関連のあると思われる四団体をとりあげ、その性格について検討したい。

## Ⅳ 体育団体の性格

### 1 大韓体育倶楽部

まず第一に、1906年3月に結成された大韓体育倶楽部である。この団体は、設立に際して「設立趣旨文」を出している。それによって、まず同倶楽部の性格を見てみよう。

#### 〈大韓体育倶楽部設立趣旨文〉

国家の盛衰は、其の国民の元氣隆盛にあり、其の元氣の隆盛は、其の国民の教育如何にあるが、現今文明列邦の教育を見るに、其の門が二つある、曰く、精神的教育である。曰く、身体的教育である。所謂精神的教育とは、其の無形をもって学問とし、高尚の心理を透明し、よく其の精神作用の奥妙を得るものである。且つ身体教育とは、其の天然稟有の肢体筋骨をもって、加意調養し、其の青年活発なる気像を一新させるものである。我惟、大韓の教育制度は、此の国民の元氣を養う一大体育的科學に基だおろそかなり、此により青年の懶弱が固定し、此により国民総体が消滅する状態に至った。何で嘆かずにいられようか。此処に吾人が感ずることあり、國中に一大体育倶楽部を設け、四方の同志青年は相互に呼びかけあい、諸般の体育に関する遊戯等によって随意に競技し

一、以青年の氣概を涵養し

一、以其の人生の娛樂を伸び伸びと行い

一、以其の上下千百載の国民の腐敗した元氣を挽回し振興させること、

惟同志よ 惟青年よ ………

光武10年3月20日

大韓体育俱樂部臨時事務所

中署中谷 第46統2戸<sup>43)</sup>

また、同俱樂部主催の運動会では、以下のような運動歌を歌っている。

垂細垂礼儀邦わが大韓明らかなり  
青年たちよ 同志たちよ 二千万同胞たちよ  
腐敗せし気象すべて捨て 活発勇氣出して見む  
大韓体育俱樂部は 有志同志で成立し  
青年交誼惇睦し 体育運動目的なり  
我が身体強健求め 文明前進に勇敢なり  
一身団体固くして 億万烏獲遺さんか  
山嶽のごとき不変心は 独立の基礎なり  
修身齊家の根本なり 忠君愛国の綱領なり<sup>44)</sup>

このように、体育によって「青年の気概を涵養」し、「人生」を楽しむ、「上下千百載の国民」の元気を挽回しようとするを目的としたのである。それは、「帝国独立」の基礎であったのである。そして、「去懦退嬰の精神を打破し、勇敢で忠誠な心身で国家富強に奉仕しようとする」ことが、この当時の体育人たちの基本精神であった<sup>45)</sup>のである。この団体がこのような目的を持ってつくられた背景は何であろうか。国家危機意識への対応であることは確かである。しかしなぜその設置者たちは、そのような思想と行動を持ちえたのであろうか。そこにはいくつかの要因が関連していると考えられる。設置者たちが、どこで、誰に、どのようにして学んだのか、またそのような学習や研究が可能であった設置者たちの階級や階層が関連するのかどうかなどである。ここではまず、設置者たちがどこで学んだかという点からその思想的背景の一つを考えてみたい。

この団体は、「官立外国語学校出身の宮内府参理と御典通訳官により組織された」<sup>46)</sup>のであるが、その出身者が玄暘運、申鳳休、韓相宇らであった。

羅絢成によれば、韓国の蹴球の始まりは、1906年初春から官立外国語学校の一つである仏語学校教師仏国人マーテル氏がその学校学生たちに指導したものである。そして、3月11日玄暘運ら三十余人が槐洞金基正宅で競球倶楽部（大韓体育倶楽部）というものを組織したが、これが我国蹴球チームの最初の組織であったという。<sup>47)</sup> また、『體育年鑑』でも、この倶楽部について韓国ではじめてのサッカーチームを組織と述べている。<sup>48)</sup> このことは、二つの新聞によって裏付けられている。皇城新聞1906年3月10日付によれば、競球倶楽部が玄暘運らによって組織されたという記事があり、<sup>49)</sup> 大韓毎日申報では、同年3月30日付記事で前掲の同倶楽部設立趣旨文が掲載されている。

したがって、同倶楽部は、外国語学校卒業生によって蹴球倶楽部として発足されたということが出来る。しかしこの団体は、蹴球などの近代スポーツのみならず、伝統的なスポーツ、即ち撃劍、柔術、打毬なども教授し、体育活動を広く普及し、青年たちの強健な心身を育成する倶楽部として設立されたものであった。<sup>50)</sup>

では、このような倶楽部を創った設置者たちが学んだ外国語学校とはどのような学校であったのだろうか。

外国語学校は、第1期(1895年5月～1906年7月)、第2期(1906年8月～1909年10月)、第3期(1909年10月～1911年11月)の三期に時代区分されている。<sup>51)</sup> 大韓体育倶楽部の設置者たちが在学したのはこのなかで第1期であり、玄暘運はじめ多くは1902年の卒業生で同窓生であった。<sup>52)</sup>

一般に「当時の学生たちの身分は、甲午改革（1895年）で身分制度は撤廃されたが、最初はやはり訳官家の子弟たちが多く、後に、両班とか常民出身も入学した」<sup>53)</sup> といわれている。訳官とは、「医官、計士等の技術官とともに、中人階級の家業として世襲されたもの」<sup>54)</sup> である。

第一期の学生の出身階層を見ると、中人階級出の人が多かった。中人階級は、一般的に思想的には西洋文化の影響を強く受けた階級であった。そのような影響を受けたエピソードとして、この時期の外国語学校学生の多くが、独立運動の指導者であった徐載弼が中心になって発刊した独立新聞（1905年4月）でこの国の独立を訴え開化思想を鼓舞した時に、これに呼応して髪を刈り不便な韓服を脱ぎ捨てて西洋式の制帽と制服を着て学校に通ったという話が伝えられている。<sup>55)</sup>

もっとも当時の外国語学校学生は、少しでも会話ができるようになれば就職できるので、完全に卒業せずやめていく者が多かったという。<sup>56)</sup>しかし、この倶楽部の発起者たちの多くは、英語学校を卒業した同窓生であった<sup>57)</sup>し、上述のような外国語学校の開化思想の影響を受けていたと考えることができるであろう。郭亨基は、玄暘運の体育思想を「開化期の諸外国語学校から受け入れた全人教育的理念に基づく近代体育教育の固有の目標と同次元から評価できるもの」と述べているが、<sup>20)</sup>このような外国語学校の思想的状況に影響されたものといえることができる。

玄暘運は、宮内府禮式院主事（1903）、禮式院翻訳官（1905）、太僕司技師（1906）、宮内部掌禮院典祀（1909）、正三品通政大夫等公職生活をしたが、日韓併合となるや官職を辞めた。そして亡国後彼は、ソウルの興仁学校、鳳鳴学校（1913）、海東新塾夜学校、忠清南道の唐城学校、咸鏡南道の保光中学校（1914）、慶尚南道の東萊高等普通学校（1935）、慶尚北道の大邱私立女学校（1938）などを転々として教鞭生活を送った。彼が教えた教科目は、英語、日本語、体育であった。<sup>58)</sup>

以上の事実からでも、大韓体育倶楽部は、民族危機の社会状況の中で開明的な学校教育を受けたいわば当時の若い知識層によって設立された団体であったといえることができる。即ち、これまでの漢学者などの旧学間における知識人が体育の必要性を認識するのとは異なったタイプの知識人が朝鮮の中に生まれていることを示すものであるといえる。

## 2 大韓国民体育会

次に、1907年10月設立された大韓国民体育会について見てみよう。同体育会は、次のような発起趣旨書を出し、その目的を明らかにしている。

### 〈大韓国民体育会発起趣旨書〉

夫体育は、徳智二教と並んで国民教育界に不可欠な一要素である。今日の国民教育は、漸次発達し、徳智二教は、切磋琢磨し将来を一新する光彩を放っているが惟ひとり体育はとて不振であり、現今各学校で施行する体育は、兵式体操の一部分を修習するにすぎない。

このようにきわめて不振な体育は、当然将来を一新する徳智二教と並ぶことができない。故に、吾人は此に所感を有し、ここに体育会を發起しようとするものである。国民教育に注意する諸君子は、奮起し、声をつらねて賛助しなければならない。吾人は、将来諸君子の賛成を得て、体育上に一新する光彩を放とうとするものである。<sup>61)</sup>

この趣旨書には、「独立」とか「国権」という言葉は全く見られない。しかし、だからといって、その事と全く無関係であると結論づけることは早計であろう。それは、二つの理由が考えられるからである。一つは、この団体の設立者自身の経歴からである。この団体は、盧伯麟（ノ・ペギン）という人物によって組織されたものである。彼は、当時の各学校の体操教師を養成する為に創設された陸軍研成学校の教師として学校兵式体操の指導育成に功績した人として知られている。また、独立運動家であり、1907年安昌浩らと新民会を組織し国権回復のための活動をしている。1914年にハワイに渡り、朴容萬たちと国民軍団を創設し軍事訓練を実施している。三・一独立運動（1919年）後、上海に渡り臨時政府の軍務総長を経て、1920年再びカリフォルニアに行き飛行士養成所を創立し飛行士を養成し、その後ウラジオストックに行き反日運動に参加し再び上海に戻り病死している。<sup>62)</sup>

このように彼自身が独立運動家であったことから考えて、このような運動と全くかけはなれたものではないだろうということである。彼は、学会の最初の団体である両班出身者を中心とする西友学会の評議員であったし、秘密結社新民会の創設者であったのである。したがって、この体育団体も、独立思想と関連するものであったと考えることができるということである。

もうひとつは、この趣旨書でいう「将来」とは何かということである。この文面では、現状の教育における体育の不振を将来の教育の発展の障害になることを重視しているのである。それは、知育や徳育との比較で述べられているのであるが、この二つの教育の発展とは何かを見る必要があるだろう。それは、結論的にいえば、当時多数の教育団体である学会というものが結成されるが、その活動が実学の普及と愛国精神の育成

であり、それがかなり普及していたこととかかわって述べているということである。そしてそれに比して体育面での遅れを指摘しているのである。この点については、後に考察する教育団体の活動を検討する中でもう一度考えることにしたい。従って、この趣旨書で強調されている将来とは、少なくともこのような観点から見る必要があるということは指摘することができる。

さらにまたこのような観点から見れば、盧伯麟は、趣旨書の中で現在の体育教育が兵式体操の「一部分」を「修習」しているに過ぎないことに留意しているのであって、もっと完全な兵式体操を行なうことを含めて、体育の内容を「一新」する必要を訴えているといえよう。したがって、ここでは、当時私立学校等で盛んであった「兵式体操」をやっていることを批判しているのではないといえよう。

盧伯麟は、日本に渡り慶応義塾普通科陸軍士官学校を卒業して、帰国後陸軍正領に任命され、官立武官学校の教育局長・校長を歴任している。1907年韓国軍隊が日本によって解散されると、一旦故郷に帰り鉱山や皮革商などを経営したりした。その後、上述のように独立運動に参加するようになったのである。彼がいつ頃から独立運動に参加するようになったかは明らかではないが、1906年11月に西友学会設立と同時に教務員の一人に選出されており、表1に示したように『西友』第7号から第10号にかけて「愛国精神談」を連載している。したがってこの時点では既に国権回復運動との関係を持っていたといえることができる。

この経歴が示す通り、彼も新学問と新式軍事訓練を学んだ一人といえよう。しかも彼の場合は明確に「学会」や「新民会」という秘密結社との関係が明らかのように、民族主義的な体育団体が愛国啓蒙運動と結び付いていたことを示しているのである。

### 3 皇城基督青年会運動部

皇城基督青年会に付設された運動部は、会長にターナー (A. B. Turner)、総務にギレット (Phillip L. Gillet) がなり、金奎植、兪星濬、玄東軾等が会員として1906年4月に創立された。<sup>63)</sup> この運動部は、青年の体質を強健にさせる目標で組織された。また、野球やバスケットボール

等の近代スポーツを輸入し、朝鮮近代体育発展に多大の貢献を残した団体といわれている。<sup>64</sup>

この時期の私立学校の多くは、反日的風潮が強かったが、キリスト教系の私立学校においても反日的風潮が強まり、そこから独立運動への参加者も出ている。皇城基督青年会運動部の発起人の一人である金奎植もその一人であった。

彼は、孤児でアンダーウッドという宣教師の家で西洋式教育と基督教教育を受けている。1904年アメリカ、プリンストン大学大学院で修士学位を受け翌年帰国している。アンダーウッド学堂の後身である倣新学校の教官等を歴任している。1913年、中国に亡命し、1918年モスクワの遠東弱小民族大会に朝鮮代表として参加し、1919年臨時政府外務部長として、パリ平和会議に全権代表として出席している。その後、学務総長、欧米委員部委員長を兼任している。また、満州に行き大韓独立軍団、高麗革命軍の組織に参加している。8・15解放後、反託運動の戦闘に立ったが、南朝鮮単独選挙に反対し、統一政府樹立に活躍したが失敗し、政治活動から引退した。<sup>65</sup>

青年会は、上述のような目的で組織されたものであるが、このような独立運動家の影響から全く無関係のものではなかったと考えられる。また、当時の運動会の性格を考えると、同青年会運動部が主催した運動会や対抗競技会<sup>66</sup>が、独立思想の普及の場であったといえるであろう。

#### 4 大韓興学会運動部

大韓興学会運動部は、日本の東京にある留学生団体である大韓、大極、共修、研学会等の会員と一般留学生が、1909年1月10日東京大韓留学生監督部内で大韓興学会を組織し、運動部を付設し作ったものである。同会第1回臨時評議会で、書記員、幹事員、会計部、編集部、出版部、教育部、討論部、可察部、運動部の各委員を選び、運動部には、尹冀鉉、邊熙駿、安布貞、張淳翊、魚允斌、尹教重、柳東透等が選任された。<sup>67</sup> 同運動部の思想と活動について筆者は既に、同会が発行した「月報」をもとにして明らかにしているように、夏季休暇を利用して帰国し、ソウルを始めとして各地で野球やテニスの模範試合を行ったり、英

米チームとの交流試合を行なったりした。このような新しいスポーツの育成に貢献する一方、一国の強弱盛衰は国民の健康と体育の発展にあるという認識から運動を奨励し春と秋に運動会を開催しているのである。<sup>50)</sup>

同学会は、留学生の親睦団体として結成されるが、他の地で母国の置かれた状態を考えるようになり、日韓合併に反対したり、自由と独立の思想に啓発されたものと成っていく。このような興学会の性格から、同運動部も単にスポーツの普及を目的としただけでなく、独立思想に基づく「国権回復」運動の一翼を担っていたといえることができる。

以上のように、この時期の体育団体の性格を検討してきた。その性格は、羅絢成が言うように「体育運動を通しての民族団結こそは、国権回復の唯一の力」であるという認識に基づくものであった。このような認識に影響を与えたものは、当時の救国運動、とりわけ愛国啓蒙運動であったことは、盧伯麟のように明確に表われていなくても、近代的新教育の影響を受けた玄鳴運や金奎植などの活動から理解することができるのである。

## 結 論

体育団結の結成は、運動会の開催を刺激として起ってくるのであるが、運動会の性格が娯楽的なものから、民族団結の場へと変化してきたように、そこには「併合」前の韓国内の教育救国、愛国啓蒙運動の影響を見逃すことができない。特に、1905年以後の運動会の内容や開催者が変化したことは、愛国啓蒙運動が活発化し『皇城』、『帝国』、『中央』、『毎日』等の新聞による啓蒙活動を始め、多くの「学会」が結成されたことと深い関わりを持っている。体育団体の発起人や設立人が、「学会」の会員であったり独立運動家であったことは、このことを物語っているのである。しかし、このような学会会員が体育団体を組織しない場合でも、国家的危機の進行という状況の中で開明的な新教育の影響を受けながら、体育が独立や国権回復に必要なものであるという認識が生まれた

ということができよう。そこには旧来の漢学中心の知識人とは異なる新しい階層から生まれた若い知識人が生まれていることを示していたのである。このような独立思想や民族主義と体育の結合という点は、朝鮮の近代体育運動の性格をきわめて特徴的に示しているのである。

1910年日韓併合によって、これらの団体はすべて解体されてしまう。多くの独立運動家は、海外に亡命したりした。しかし、ここで生まれた教育団体における思想と運動は、完全に消し去ることは出来なかった。1920年、日本留学生やソウル在住体育人によって朝鮮体育会が結成されるのである。この団体が、窒息下の朝鮮人にとって一つの文化的光彩を放つ運動を展開したことは言うまでもない。

併合前の体育団体結成の思想と行動は、優勝劣敗の競争社会にあって朝鮮が生き抜いていくために必要な体力の必要性を「民族の身体」として位置付け、「民族危機」を克服する方途として規定するものであり、その後の体育運動の思想的基礎を形成されるものであったということができよう。

## 注

- 1) 羅綯成 韓国体育史 文泉社 ソウル 1972
- 2) 羅綯成 韓国体育史の研究 数学研究社 ソウル 1981
- 3) 大韓体育会編 大韓体育会史 ソウル 1965
- 4) 同注2 pp.32-33
- 5) 西尾達雄 二十世紀初頭朝鮮における「学会」の体育思想とその活動について一『西友』、『西北学会月報』を中心にして一日本社会事業大学紀要 第33集 1987, 同題目一『大韓興学報』を中心にして一日本社会事業大学紀要 第34集 1988
- 6) 世界教育史研究会編 世界教育史体系5 朝鮮教育史 p.237 講談社 1975
- 7) 姜在彦 近代朝鮮の思想 p.170 紀之國屋書店 1971
- 8) 同上 p.206-207
- 9) 同上 p.208
- 10) 韓国学部編 韓国ノ既往及現在 p.19 1909 『韓』第80号「韓国近代教育史資料」所収 韓国研究院 1978
- 11) 同上
- 12) 韓国学部編 韓国教育 p.35 1909 『韓』第80号「韓国近代教育史資料」所収 韓国研究院 1978
- 13) 李鉉淙 湖南学会について 『韓』第45号 p.45 韓国研究院 1975

- 14) 同注7 p.209
- 15) 西尾達雄 20世紀初頭朝鮮の学校体育 p.53 大阪体育学研究20号 1982
- 16) 西尾達雄 二十世紀初頭朝鮮における「学会」の体育思想とその活動について—『西友』『西北学会月報』を中心にして—日本社会事業大学紀要 第33集1987
- 17) 韓国学文献研究所編 韓国開化期学術誌『西友』上下 p.98 亜細亞文化社ソウル 1976
- 18) 李鉉淙 畿湖興学会について 『韓』第45号 p.31 韓国研究院 1975
- 19) 同注7 p.211
- 20) 同上
- 21) 国史編纂委員会 韓国資料叢書 第三 海鶴遺書全『一斧劈破論』韓国史学会 1958
- 22) 安鍾和訳術 元泳義校閔 初等倫理学教科書 廣学書舗 ソウル 1907
- 23) 同上 pp.5-6
- 24) 同注1 pp.127
- 25) 同上
- 26) 李學來 韓末運動会開催一覧表 韓国近代体育史研究〈付録4〉pp.311-329 東国大学校大学院博士論文 1985
- 27) 学会機関紙などの記事には、これ以外のものが掲載されている。例えば、平安郡学校春季連合大運動会（1907年3月29日、場所不明）、女学校連合大運動会（1907年5月27日、奨忠壇）、安州郡連合運動会（1908年5月、不明）、義州郡連合運動会（1908年5月、不明）、平壤各学校春季連合運動会（1908年、不明）など。  
注16の論文の注49～53参照。
- 28) 申煥鎬他 韓国現代史3 民族の抵抗 p.299 新丘文化社 ソウル 1971
- 29) 文部省教育編纂会 明治以降教育制度発達史 第十巻 pp.11～12 昭和14
- 30) 同注28
- 31) 同注2 p.33
- 32) 同上 pp.33-34
- 33) 同上 p.33
- 34) 同上 p.34
- 35) 同上 p.34-35
- 36) 韓国文化刊行会編 皇城新聞（影印本）隆熙4（1910）年5月17日付 第21巻 p.53 第3371号 p.1 影仁文化社 ソウル 1981
- 37) 同注28 p.299
- 38) 朴炳采他 日帝下の文化運動史 p.68 民衆書店 ソウル 1970
- 39) 同注1 pp.127-128
- 40) 同注1 p.128
- 41) 同注1 pp.137-141
- 42) 西尾達雄 1909年改正韓国学校令にみる「学校体操」体育学研究 第28巻 第4号 1984
- 43) 韓国新聞研究会編 大韓毎日申報（影印本）第2巻 p.1715 第181号 p.3

影仁文化社 ソウル 1977

- 44) 同注37 p.70
- 45) 同上
- 46) 羅絢成 韓国運動競技史 pp.47-50 普文社 ソウル 1958
- 47) 同上 p.50
- 48) 大韓体育会 体育年鑑 1978
- 49) 同注38 第12巻 p.330 第2124号 p.2
- 50) 郭亨基 未刊 玄暘運先生と大韓体育俱樂部 1988
- 51) 李光麟 韓国開化史研究 pp.150-157 一潮閣 ソウル 1947
- 52) 郭亨基(Kwak Hyungkee) Hyun Yangwoon and the Club for Korean Athletics (玄暘運と大韓体育俱樂部) Seoul Olympic Scientific Congress Seoul 1988
- 53) 同注51 p.142
- 54) 同上 p.135
- 55) 同上
- 56) 李光麟 韓国開化史研究 p.144 一潮閣 ソウル 1974
- 57) 同注50
- 58) 同上
- 59) 同上
- 60) 同注36 第15巻 p.561 隆熙元(1907)年10月15日付 第2607号 p.1
- 61) 同注1 p.138-139
- 62) 李熙昇他編 韓人名大辞典 新丘文化社 ソウル 1976
- 63) 同注38 p.70
- 64) 同注1 p.138
- 65) 同注62
- 66) 羅絢成『韓国運動競技史』によれば、当時、大韓体育俱樂部、皇城基督青年会、大昌体育部、青強体育部(中東体育部)、倣新学校やその他の私立学校等の間で、蹴球、野球、箏球などの競技会がおこなわれている。p.51, p.65, p.77
- 67) 韓国学文献研究所編 韓国開化期学術誌 『大韓興学报』上 p.98 亜細亜文化社 ソウル 1976
- 68) 西尾達雄 二十世紀初頭における「学会」の体育思想とその活動について —『大韓興学会報』を中心にして— 日本社会事業大学紀要 1988

#### 参考引用文献

1. 朴炳采(Bak-byonchea) 他 日帝下の文化運動史 民衆書店 1970
2. 大韓体育会 體育年鑑 1978
3. 姜在彦(Gan-jaeeon) 近代朝鮮の思想紀乃国屋書店 1971
4. 李熙昇(I-kisheng) 他編 韓人名大辞典 新丘文化社 1976
5. 李光麟(I-Kwanglin) 韓国開化史研究 一潮閣 1974
6. 韓国文化刊行会編 皇城新聞(影印本) 景仁文化社 1981

7. 韓国学文献研究所編 韓国開化期學術誌「西友」上・下 亜細亞文化社 1976
  8. 韓国新聞研究所編 大韓毎日申報(影印本) 2巻 p.1715 1906年3月30日付第181号 3頁 景仁文化社 1977
  9. 国史編纂委員会韓国史料叢書第三・海鶴遺書全(一斧劈破論 李沂) 韓国史学会 1985
  10. 郭亨基 未刊 玄暘運と大韓体育俱樂部 1988
  10. 郭亨基 (Kwak Hyungkee) Hyun Yangwoon and the Club for Korean Athletics (玄暘運と大韓体育俱樂部) Seoul Olynpic Scientific Congress Seoul 1988
  11. 羅絢成(Nah-hyunson) 韓国運動競技史 普文社 1958
  12. 羅絢成 韓国體育史 文泉社 1972
  13. 羅絢成 韓国體育史の研究 教学研究社 1981
  14. 西尾達雄 20世紀初頭朝鮮の学校教育 大阪体育学研究第20号 1982
  15. 西尾達雄 1908年韓国改正学校令にみる学校体操 体育学研究 第28巻 第4号 1984
  16. 西尾達雄 二十世紀初頭朝鮮における「学会」の体育思想とその活動について—『西友』・『西北学会月報』を中心にして— 日本社会事業大学紀要 第33集 1987
  17. 西尾達雄 二十世紀初頭朝鮮における「学会」の体育思想とその活動について—『大韓興学报』を中心にして— 日本社会事業大学紀要 第34集 1988
  18. 世界教育史研究会編 世界教育史体系5 朝鮮教育史 講談社 1975
  19. 申奭鎬(Sin-seokho)他 韓国現代史3 民族の抵抗 新丘文化社 1971
  20. 東亜出版社漢韓大事典 東亜出版社 1982
  21. 崔書勉(Tsuei-Somien)編 韓 第4巻 第9号 韓国研究院 1975
  22. ヤン スドン(Yang-sudong)監修 新国語辞典 東亜出版社 1959
- \*字母のローマ字表記については、「新国語辞典」の1952年ハンブルグのローマ字表記表及び東亜漢韓大辞典のローマ字表記を参考にした。